第二十二日　天の門（其二）

（1）―天國に登るには、罪を犯さない上に、務めて徳を修め、行を研き、幾分なりともイエズスに似奉らねばならぬ。然るに聖母を敬ひ愛する樣になると、心に無罪の清さを保つて行くのが六ケしくないし、身を拋つて人の爲に盡さうと云ふ氣も出て來るし、主に仕へ奉るのが、むしろ愉快に感ぜられるので、それだけ易々と天國へ這入れるのである。

抑も無罪の白衣を汚さずして之を洗禮のまゝ保つて行くのは誰の爲にも容易なことでない。殊に身内には紅い血が沸つて居ると云ふ青年處女の身になつて見ると、右も左も敵ばかりで、而も其敵は人を欺すのに頗る妙を得て居る、見た所、如何にも親切らしい、お負けに此方は未だ全くの世間知らずで、目に

觸れるものが何でも珍しく、面白さうである。見たい、何んなものだか知りたい、何うにかして其秘密を探りたいと思ひ、氣はそわ〳〵する、心は擾れる、馬鹿〳〵しい空想が連りに浮み出て來ると云ふ鹽梅、青年時代には能くさうした怖ろしい暴風雨が捲き起るものである。

然しその知りたい、探りたい、試みたいと云ふ望に從はない限りは、未だ誘惑はれて居るまでの事で、罪でも何でもない。して其誘惑に倒れない爲には、不幸にして倒れても直に起き上る爲には、固より悔悛の秘蹟に優る良法はないが、それに次で最も効果著しいのは聖母マリアに賴り縋ることである。

で善良な、心の清い青年處女でありたいとは思ひながら、何うも虛榮心に搖られる、世間の榮華に眼を眩まされさう、惡魔の黑い手に引張られて仕方がないと云ふ人は心から聖母を愛し、何時でも、何處に於ても聖母を忘れない樣にせねばならぬ。朝目が醒めるや、直に聖母を思ひ、今日は聖母の御氣に適ふ樣に

したい、聖母の如く信心で、慎深くて熱心に立ち働きたいと思ひ定める。夕方になれば篤と我身の上を糺明して、過つた點を見付けたら、心より痛悔し、明日は一層眞面目に、一層忠實に聖母に仕へ奉ると決心する。日中にも心は聖母の御手に托けて置いて、悪い言が耳に入つたり、聞かぬでも可い事を尋ねて見たいと思つたり、危い談話を遣り出さう、汚らはしい書を開けて見ようと云ふ氣になつたりした時には、暫く手を控へて「私の心は聖母の御手に付して居る、取り戻しては可けない。私は何んなことがあつても、無罪の白衣を汚してはならぬ、之を汚しては聖母に對して相すまぬ、私は是非とも聖母の子女に適しからねばならぬ。是非とも聖母の御意に適ひ、益々その御寵愛を辱うせねばならぬ。後日聖母の御前に立顯はれる時、顔を赤めて耻入る所があつてはならぬ」と斯う考へ、若しや不幸にして罪に倒れる樣なことがあつたら、直に聖母に縋つて起ち上る。聖母を悲ませ奉つたにせよ、然し聖母は何時になつて

も慈悲深き童貞、哀憐の御母にて在すことを思ひ出したら、恐れて逃げ出す譯はない。寧ろ賴母しく思つて、情の御腕に縋りつきさへしたら、決して天の門に遠かる樣な憂はあるまい。

(2)—聖母を敬ひ愛し奉ると、一身を抛つて人の爲に盡さうと云ふ氣にもなつて來る。我等は現世を渡るに付けて、樣々の艱難辛苦を見るものである。親の爲、子の爲、毎日々々汗水たらして働かねばならぬ。貧困者も助けねばならぬ、病人も見舞はねばならぬ、臨終者の枕頭に付き切りで、之を勞り慰め、勵まして、善き終を遂げさせねばならぬ。そんな樣に、自分の時間を抛げ出しお金を抛げ出し、體を抛げ出し、心までも抛げ出して、人を慰め、憐み、助けるのは、如何にも基督信者に似つかはしい立派な德ではあるが、然し夫れはなか〳〵容易な事ではない、たゞ平生聖母を深く愛し、聖母もさう云ふ樣に一身を抛出して人の爲に盡し給うたことを思ひ、又聖母が十字架より卸され給へる

御子の冷い屍を御腕に受取り給うた如く、世に捨てられて、冷くなつて居る憐れな人を溫い情の腕に抱いてやる人、そんな人の爲には、天の門が大く開いて居るのだと云ふことを考へたならば、如何に困難な業でも易々と遣つてのける勇氣が出て來るものである。

終に聖母の在す所には必ず幸福と喜悅とが漲るのであつた。ナザレトの住宅は極く粗末な、狹苦しい家ではあつたが、聖母とイエズスとによつて夫れが金銀の光眩き宮殿よりも平和、幸福な家となつたのである。總て不安、胸騷ぎと云ふものは、良からぬ行爲、淸からぬ思に伴ふもので、神の嫌ひ給ふ所の愛情を胸に抱くやうになると、心がそわ〳〵して夜も碌に眠れぬ位になつて來るものだ。之に反して神を思ひ、聖母を愛し奉ると、胸は言ふべからざる平和に漲り、心は譬へやうもない樂を覺えて來る。聖人等が、堪へ難い苦痛の中にあつても、其平和を失ひ給はなかつたのは、預々神を思ひ、聖母を愛して居

られたからではないだらうか。で我等も聖母を一心に愛し奉るならば、世の人の味ひ得ない眞の平和、僞りなき喜悅を樂むことが出來る。又それと共に我身も聖母の如く到る處に平和、喜悅を漲す樣になる。殊に靑年處女たるものが聖母に倣ひ、身も心も淸淨で、敬虔で、よく親に從ひ、兄弟仲睦しく、朋友相信ずると云ふ樣にして行くと、家庭をして平和、幸福の漲れる天國ともなすことが出來る。然し我儘で、不從順で、不品行でゞもあつたものなら、夫れこそ大變で、家庭は忽ち堪ふべからざる地獄となつて了ふ。願はくは靑年諸君、聖母に倣つて、己が家庭を天國の片隅となし、自分が其天國の門となるやうに務めて欲しいものである。

(3)—要するに聖母は天の門で、此の門よりして總ての幸福が地上に雨らされ、此門よりして我等の願望が天に達き、我等の嘆息が神の御耳に達するのである。意外の災難に罹り、思はぬ失敗をした、もう親戚も顧みて呉れない、友

人も知らぬ顏を極め込む、頼の綱は世に一條も殘らなくなつて了つた、と云ふ時にでも、この天の門を叩いて情を乞うたら、聖母は必ず我等を受付けて、慰安を與へ、氣力を回復させ、涙を拭き取つて、悲しい中にも何とも知れぬ喜悅を覺えさして下さるのである。

あゝこの天の門の前に立つて、始終之を叩いて居る人は如何に幸福であらうか、その望む所は與へられ、その爲す所は祝せられ、その喜悅は清くせられ、その悲哀は和げられ、その心は勵まされ、その罪は拭ひ去られ、その德は磨き立てられて、終には其門を潜つて天の御國に進み入り、永遠窮りなき幸福を樂むことさへ出來るのではないか。

（實例）—第十五回及び第十六回出現——三月三日洞窟の前に群集せる見物人は四千人に上つた。ベルナデッタは例の如く跪いてコンタスを誦へ、一心に野薔薇の上を見詰めて居たが、今日に限つて彼女の顏には、何等の變化も

起らなかつた、彼女は地を接吻し、身に十字架の印をなして、起ち上り、「今日姫君はお現れになりません」と正直に云つて歸宅した。

一應歸宅はしたものゝ、何だか物足りない心地がしてならない、正午頃、叔父のサヂユスを賴んで、再び洞窟に行つたが、今度は何時もの如く姫君が現れ給うたので、ベラマル神父の御返事を申上げ、今朝お見えにならなかつた理由をも尋ねた。

「今朝出現しなかつたのは、あなたの樣子を見ようとして集つた群衆の中に、猥がましい振舞をして、この洞窟を瀆したものが居たからです」

と姫君はお答へになつた。

翌三月四日はベルナデッタが姫君と約束した十五日間の最後の日である。今日こそ姫君は名乘り給ふであらう。司祭の求に應じて薔薇の花を咲かせ給ふであらうと云ふもので、見物人は各方面より馳せ集り、其數無慮二万人にも上つ

た。

ベルナデツタは洞窟の前に跪き、蠟燭に火を點し、十字架のしるしをして靜に祈り始めると、暫くにして顏は眞白に變つた、姫君が出現れ給うたのだ。

ベルナデツタは時々祈を止めて、或は微笑み、或は頭を垂れ、或は進んで洞窟の入口に到り、或は立ちながら會釋する等して居たが、終に元の座に歸り、暫く祈つてから十字架の印をなし、蠟燭の火を消して歸り去つた。

奪魂は一時間ばかりも續いた、その間に二万の見物人はまたゝきもせでベルナデツタを見守り、その一擧一動に注意したものであるが、然し姫君は終に名乘り給はず、野薔薇にも花は咲かなかつた。人々は期待を裏切られたと云ふ調子で、聊か失望の體であつた。

然しベラマル師の要求その物が實は民衆的好奇心を臭はせ、主が惡魔憑を癒し給うたのを見ながら、更に天からの徵を求めたフアリザイ人等の夫れに類似

して居たのである。奇蹟はブリエットの平癒、殊にベルナデツタの身の上に、無知、無學な少女が驚くばかりに超自然界のことに明るく、心は天使の清淨に輝き渡れるその身の上に顯はれて居たのではないか……我等もベルナデツタの如く心から聖母を愛し、その御指導に從ひ、その御鑑に則り奉ると、日一日と罪に遠かり、德を慕ひ愛し、罪惡に汚れたる俗世間に在りながら、奇蹟と驚かれるほどの清淨無垢に輝き、天の門を潛ることが出來るに至るであらう。さうなつたら我等自身がカトリツク敎の眞正さを證明する奇蹟となるのではあるまいか。

第二十三日　曉の星（其一）

（1）—暗い〳〵夜の海を馳つて居る一隻の船があるとせよ、灘中で俄に空模

様が變つて、怖ろしい暴風となつた。山の如き大浪は、凄じい唸を擧げて船緣に打突かる。船は宛ら木葉の如く、忽ちにして九天の上に突上げられるかと思へば、又忽ちにして奈落の底に沈み行くかの樣、水夫も船客も今や生きたる心地さへ無い。斯くて幾時間と猛り狂ふ荒波に揉まれて、今にも、今にもと、たゞ海底の藻屑となるのを竢つて居た、……不圖、雲の切間がボウと淡白く見え出した。風はまだ止まないが、東の空が何だか明るくなつて來た樣だな、と思つて居る中に、雲を破つて曉の明星が懷しい姿を見せた。「おや、夜明だ、助かつた。氣を確に持て、心配するな」と忽ち歡喜の聲は船中に鳴り亙つた。

救世主の御降誕あそばす迄の世界は、この荒れに荒れにし眞暗い海であつた。人類は深い〳〵誤謬の闇に包まれ、其智慧は暗み、其心は捻け、たゞもう罪惡のドン底に沈み行くのみであつた。此時に當つて聖母マリアが曉の星となつて、その懷しい光を放つて顯はれ、やがて救世主の來らせ給ふべきことをお

告げになつたので、人々はホッと安堵の胸を擦り、希望の光に蘇生つたものである。

(2)—然しながら聖母は救世主の御降誕間近になつてから、漸く世界にお顯れになつたのではない。既に世の始から柔い光を送り、人々の希望を喚醒して止み給はぬのであつた。思ふにアダムが明い樂園を逐拂はれ、暗い荆棘の生えまくつた世界に突出された時の失望落膽と言つたら無かつたであらう。然し神はアダムをお見棄て下さらず、遠い〳〵幾千年の遙か向ふの山の端に曉の星を仰がせなさつた。救世主の御母、惡魔の頭を踏み碎くべき救主の御母を仰がせなさつた。其星の柔い光を望見ると共に、アダムの胸は希望に躍らなかつたであらうか、其星が自分に微笑んでくれるかの樣に感じなかつたであらうか。「恐れなさるな、貴方の罪を贖ひ、過失を償ひ、其過失の爲に生じた破壞を繕ふが爲に、神樣は私をこの位置にお据ゑ下さいました。氣を確に持ちなさ

い。一度は〝あゝ禍なる過失であつたよ〟と呼ぶ時が參ります。力を落す譯はありません」と言はれるかの樣に感じなかつたであらうか。

兎に角、アダムは神の御約束を善く分つた。自分の子孫に救世主の御母たるべき婦人が生れると云ふことを分り、多少その煩悶を慰められたのである。彼は樂園に在つて、何不自由なく暮した、神に近接し、親しく語を交へ、色々と有難い御惠を戴いたものである。然るに今や其樂園を締出された、その神に突離された、その優しい御話を承ることも出來なくなつた。有難いとも有難い色々の御惠までも失ふに至つたかと思つては、自分の淺間しさ、自分の馬鹿馬鹿しさが、今更の如くヒシ〳〵と胸に逼つて、堪へ難い苦痛を覺えさせられたに相違ない。幸に彼は神の御約束を堅く信じ、遙に救世主とその御母とを望見て、纔に苦痛を和げ、煩悶を忘れ得たのである。

彼の子孫になると、それ程の苦痛を知らぬのであつた。彼等はさう神に接近

したこともなければ、清淨無垢の身に造られた上で、罪惡の泥濁の中へ落ち込んだ譯でも無い。初から邪曲の中にやどされ、隨つて罪を汚らはしく思ふの情も、左まで甚しからぬのであつた。夫にしても自分は幸福な地位より墮落したものである。靈魂にせよ、肉身にせよ、智、情、意にせよ、淺からぬ傷を蒙り、隨分と調和を失つて居るのだと云ふことに氣が附いて、悲しい思に沈み入らなかつたであらうか。然しアダムは自分が遙か向ふに仰視た美しい星、自分等の救はるべき正義の太陽、其太陽に先じて東の空に顯はるべき曉の星を語り聞かせて、彼等の心を引立て、その悲を慰めた。夫より太祖、豫言者等が相續いで起り、その感ずべき德行、熱烈なる叫を以て、世の迷夢を醒し、その行くべき道を示すと共に、やはり正義の太陽を望み、其太陽に先ずべき曉の星を俟ち望む樣に勸めて止まないのであつた。

(3)—罪惡の眞闇黑に閉され、惡魔は哮へ、肉慾は狂ふ其間にあつて、彼等

が僅に其慰を得、力を得、惡に逆ひ、善を勵んで行くことを得たのは、實に彼の正義の太陽と、曉の星とに堅くその希望の綱を結び付けて居たからである。されば舊約時代の人々は、この曉の星の出現を如何に熱く俟望んだものであらうか。「天よ、上より露降らせ、雲よ、義者を雨降らせよ」、と救世主の御降誕の一日も早からんことを祈る中にも、其救世主を生み奉るべき聖母の御誕生をも冀はなかつたであらうか。

（4）—我等も罪を犯すと、心の中は眞暗になる。アダムが明るい樂園から眞暗な世界に突出された時の樣に、心は忽ちその明るい光を失ふ、神はその優しい御姿をお隱しになる。惡魔は嘯く、肉慾は哮へる、良心の責は凄じい暴風となつて心の船緣に容赦なく打突かる。夫れは〳〵起つても居ても居られたものではない。斯る時に我等の希望となり、救助となり、氣力となつてくれるものは獨り曉の星たる聖母マリアである。その優しい、柔かい慈光を一目仰視たば

かりで、急に活き上つた樣な心地を覺える、希望は湧いて來る、活氣は戻つて來る。惡魔の嘯きにも、肉慾の叫びにも怯えないで、罪惡の綱はスパリとかなぐり棄て、終に其星の光に導かれて正義の太陽たるイエズスに近き奉ることも出來るのである。

（實例）—第十七回出現——三月四日から三週間と云ふものは、姫君の出現がなかつた。然し其間にもベルナデツタは姫君のことを忘れ得ないで、學校から歸ればよく友達と離れて洞窟に行き、熱心にロザリオを誦へるのであつた三月二十五日は聖母が大天使ガブリエルより御告を蒙られた大祝日で、この日夥しい群衆が四方からマツサビエルに雲集した。

ベルナデツタも朝早く起きて洞窟の前に行つて見ると、洞窟の口は既に光り輝き、姫君は笑を含んで佇みながらベルナデツタを歡び迎へ給ふのであつた。

ベルナデツタは跪いてロザリオを誦へ始めたが、誦へて居る間に、姫君の

御名を問うて見たい氣が連りに起つて來たので、「あなた樣の御名を承りたうございます」と申上げた。然し姫君はたゞ御頭を下げて、微笑ませ給ふばかりで、何とも仰しやらない。重ねて問うて見たが、やはり仰しやつて下さらない。ベルナデツタはいよ〳〵堪らなくなり、

「私の樣な賤しい者が御名をお伺ひ申すのは、ほんたうに畏多いことでムいますけれども、特別の御慈悲を以て、どうぞお聞かせ下さいませ、伏してお願ひ申上げます」

と云つた。其時野薔薇の上に立ち、不思議なメダイに見るが如くして居られた姫君は、ベルナデツタが三度目の願を申上げるや、最嚴かに、しかも謙遜の面持になり、兩手を合せ、胸の高さに擧げて天を仰ぎ、夫から靜に御手を離して、ベルナデツタの方へ身を傾け、御聲をふるはせながら「Je suis l'immaculée conception——我は汚なきやどり也」と曰うた上で、消え失せ給うた。

果して姫君は聖母にて在した。我等の所謂曉の星にて在した。その汚なき御やどりによつて、惡魔の頭を踏み碎き、人類をあらゆる罪、あらゆる憂、悲より救ひ給ひし神の御母にて在したのである。「あゝ原罪なくしてやどり給ひし聖マリアよ、我等の爲に祈り給へ。」

第二十四日　曉の星（其一）

（1）—曉の星は、黎明の光の張れる東の空にキラ〳〵と美しい光を放つものであつて、夜がホンノリと白んで來たかと思ふと、忽ちこの明星が山の端から顯れ出る。夜は終つて晝が近いた、もう日の出も遠くはないぞと告げる。すると今まで我物顏に暗の世界を飛び廻つて居た夜の鳥は、ソロ〳〵塒に歸る、狐狸の類は穴に引込む、惡漢はその惡い企を中止する。樂しい平和、靜な喜悅

が世界に漲り渡つて來るのである。

聖母の御誕生あそばす迄と云ふものは、世界は眞暗で、惡魔は自由自在に、のさばり歩き、罪惡は時を得顏に蔓り昌えて居るのに、人々は之を刈り盡す道を知らず、終には自暴自棄となり、有ゆる罪惡に身を持ち崩したものである。然るに聖母マリアが曉の星として世界に顯はれ給ふや、罪惡の夜は玆に終を告げて、正義の晝が近いて來た。惡魔はその黑い手を引込ませた。悲しい夜の暗は消え失せて、喜ばしい曙の光がさし初めた、日が近いたぞ、正義の日たる救世主が東の空に顯はれ給ふのも遠くはないぞ、と知らして下さつた。もういよ〳〵正義の晝になる。善の花が見事に咲亂れ、德の實が美しく實る樂しい正義の晝となるのである。

曉の明星が輝いて、東の空が白み渡ると、万物は急に生き返つて來る。小鳥は調子よく歌ひ出す、眠つて居た草木は朝風に搖られて美しい目を睜く、溪流

は靜な音を立て丶流れる、海はいよ〳〵穩に、山はいよ〳〵青く、花はいよ〳〵紅に、物として曙の光を喜ばざるものなしである。

(2)—世界の精神界は曉の星たる聖母の御誕生によつて、より以上の御惠を蒙るに至つた。なるほど聖母の御誕生前にも、神はアベル、ノエ、アブラハムモイゼ、ダヴイド、エリア、ダニエル等の如き有名な人物を星と輝かして、暗黑に閉された當時の人々を慰め給うた。女性の中にもルトの如き、サムエルの母アンナの如き、エステル、ユヂトの如き、德操勝れし婦人を起して、行くべき道をお示しになつた。然し聖母マリアが一たび曉の星となつて顯はれ給ふや、是等の星は悉く其光を失つた。實に聖母の如く閑雅で、愛らしくて、清く美しいものが、世界に又と見られるだらうか。聖母は曉の星の如く暗を照した。白み渡つた曙の如く希望を與へて人の心を生返らせた。朝露の如く人の心を鮮になし、勢を附け、活氣を添へた。生命の源、喜悅の泉、希望の基

たる正義の太陽を與へて、世界を全く一變せしめ給うたのである。

曉の星の顯はれると共に、万物は次第に美しく彩られ、やがて黄金色に輝いた雲の波間から太陽が悠然と昇つて來る、世界は全く昨日の疲を洗ひ去られて新らしい活氣に躍り立つ。聖母の御誕生によつて世界の面目の一新されたのも恰當さうであつた。其時から風俗も、思想も、個人も、社會も一切新らしくなつた。清淨や、献身や、平和や、博愛や等の柔かい空氣が世界に漲うて來た。

試に思へ、聖母以前の世界に在つて、婦人の憧憬れる所は唯だ肉體美であつた。唯だ獸慾の滿足、五官の歡樂これのみであつた。惡く言へば賣笑婦を以て自己の理想とし、男子も亦敢へて夫れ以上を婦人に期待しなかつたのである。

斯る時に聖母はその優しい清淨無垢の光を放つて、世界に顯はれ給うた、今まで肉體美の外に美と云ふものがあらうとは夢にも思はなかつた婦人等は、この清い、尊い、汚ない、透通つた樣な美しさを仰いで等しく驚きの目を睜つ

た。自分等とても賣笑婦の樣な賤しい地位に安ずべきでない。獸慾の滿足、五官の歡樂を以て理想とするが如きは、人間を侮辱したものであると悟る樣になつて來た。

斯くて廉耻と云ふ觀念すら失つて居た異敎の世界は、聖母の御跡を踐めるアグネスやルチヅやセシリヤやカタリナの前に頭を下げた。堂々たる男子を凹ませる程の彼等の知識に驚き、高遠にして及び難き彼等の理論に舌を捲いた。彼等が財を輕んじ、富貴を輕んじ、身の榮華を輕んじ、掛け換の無い生命までも拋つて顧みないのを見ては、腹の底から感服した。是まで婦人は到底學問なんか修める頭は持たぬのだ、家に在つても、國に在つても、たゞ男子に從つてさへ居れば可いのだ、たゞ婦人室にぢつとして居て、男子の玩具になるのが婦人の天職だ位に思はれて居たのに、今や聖母の御蔭で、婦人の理想が高まるに隨つて、クロチルダや、クネゴンタや、ブランシユ・ド・カスチルやと云ふ樣な賢婦人

が續々と顯はれ出た。彼等は聖母の如き鋭い才を持つて居た、優しい心を抱いて居た、一身を抛出して、人の爲、國の爲に盡すだけの勇氣をも備へて居た。聖母が曉の星となつて世の人に正義の太陽をお見せ下さつた如く、彼の婦人等も、やはり其時代〳〵の曉の星となり、其國民をイエズスの御許に案内した、信仰の光を仰がしてくれたのである。

（3）—世界は最初の婦人エワに由つて滅亡の不幸を招いたが、第二のエワたる聖母によつて、救濟の曙を仰いだのである。今日と雖も、婦人の天職は毫も以前と異らない、一家に在つても、一國に在つても、婦人はエワとなつて滅亡の不幸を招くか、聖母となつて、救濟の曙を輝かすかである。使徒時代から今に至るまで、常に婦人が最先に敎を信じて、救靈の道に案内して居る。既に救靈の道に案内してからでも、入つては良人の信仰を養ひ、子女の德行を磨き、出ては貧困者を助け、寄るべなき老人や孤兒を恤み、優しい、溫い、基

督敎の光を漾すべく務めて止まないのである。如何に不熱心な家庭でも、冷淡な敎會でも、聖母の如き清い、汚れない、そして世の爲、人の爲に身を抛出して盡すと云ふ婦人が一人でもあると、數年ならずして、見違へるまでに變つて來るものである。

惡魔は之を知つて居る。エワを欺して神の誡命を破らせ、因つて以てアダムを罪に引張り込んだ味を覺えて居る、婦人を虜にしない限りは、到底人類を墮落させ得ないと飽まで承知して居るから、今日でも始終婦人に手を出す。婦人の虛榮心を煽つて、世間の富貴、榮華に憧憬れさせる。そして次第に信仰を失はせ、神を忘れさせ、罪より罪へと溺れさして、夫から男子を釣らせる、社會を腐敗させる、罪惡を蔓らせる。であるから婦人たる者は決して〳〵惡魔の欺の手に乘つてはならぬ。寧ろ聖母に倣ひ、閑雅に、愼ましく、身も心も淸く汚なく保つて、世の人にまで、眞理の光を仰がすべき曉の星となる樣、務めな

ければならぬ。

（實　例）—第十八回出現——この時までベルナデッタはまだ初聖體を領けて居なかつたので、御復活が來ても、他の信者等の如く聖體拜領の樂を味ふことが出來ない。聖母はそれを憐み給うてか、四月七日（御復活後の水曜日、火曜日と書いた書もある）に出現して、彼女の心を慰め給うた。この日ベルナデッタは跪いて左手にロザリオを執り、右手には大きな二尺程もある蠟燭を持ち、熱心に祈つゝ居たが、聖母の御出現あそばすや、彼女は恍惚となり、額は水久の山に漲る光明に照され、天使とも紛ふばかりの崇高さに輝いて來た。

やがて彼女は膝行りながら洞窟に進んで行つたが、急に途中で止り、知らず〳〵の中に蠟燭を持つて居る手と左手とを胸の前に持つて來たので、蠟燭の火は左手の指の間を通つて燃え上つた。それが十五分間餘りも續いたが、ベルナデッタは平然として、少も熱を感じないやうであつた。其場に居合せてこの光

景を見て居た醫學博士ドーズス氏は後で火の當つた指を精密に調べて見たが、微な火傷の痕さへなかつた。

蠟燭は象徴的意義を有する、神の御前に燈され、焔となり、煙となつて燃え切れるものだが、我等も神を愛して燃え立ち、その奉仕の爲には一切を殘らず使ひ潰さねばならぬ。その爲には、蠟燭の焔が眞直ぐに燃え上るが如く、我等の言語動作も始終天を指し、天に向つて居なければなぬ、然し情慾の風の吹き荒ぶこの俗世間に住んで居る間は、往々にして我等の心の焔が右に吹かれ、左に靡かうとしないにも限らない、斯る際にはベルナデッタの如く、一心に曉の星なる聖母を仰ぎ、その御助を祈り、その御鑑に則るべく務めて止まなかつたら、決してそれに燒かれる樣な憂はないであう。

第二十五日　曉の星（其三）

（1）—星光の多い靜な夜などに、市街を貫き流れる川側に立つて見よ、兩岸の灯影は長く水に落ち、美しく碎けて絕えず流れて居る、街道には色々の人がぞろ〳〵と往來して居る、その騷々しい足音に雜つて遠近の家々からは笑聲が聞える、話聲が聞える、泣く聲、叫く聲、怒鳴る聲、樣々の嬉しい、哀しい、喜ばしい、厭らしい聲が聞える。然し一たび眼を擧げて天空を仰がば、幾千万と數限りもなき大小の星が騷がしい人間世界の物音なんかは全く知らず顏で、清い、優しい、堪らないほど美しい微笑を見せて、靜に瞬きして居るのを見るであらう。

世間に憧憬れて居る、下らない、ハイカラな青年、處女の汚れた胸と、曉の

星たる聖母の御姿を輝かして居る青年處女の淸い心とは、斯んな樣に違つて居るのである。此方は何時も淸い美しい光を浴びて、言ひ知れぬ平和を樂んで居るのに反して、彼方は頭が絕えず動搖いて居る、胸が何時も騷いで居る、嬉しい事や、哀しい事や、喜ばしい事、厭らしい事が始終心の中を往來して居る、落付いて平和を樂むと云ふことは全く出來ないのである。

然し彼等が斯うなるのは、信仰を有たねばならぬ。イエズスがカフらである、曉の星を仰がないからである。

心の平和を樂みたいと思ふならば、信仰を有たねばならぬ。イエズスがカフアルナウムの町を歩いて居られると、二人の盲者が後を隨けて來て、連りに、「ダヴィドの子、我等を憐み給へ」と叫んだ。イエズスは聞えぬ振りして、路を續け、唯ある家にお這入りになると、盲者も其家に這入つて來た。「私が之を爲て上げ得ることを信じますか」とイエズスはお尋ねになつた。「ハイ、信じ

ます」と二人が答へたから、イエズスは彼等の目に御手を觸れて、「汝等の信仰のまゝに成る樣に」と仰しやつたら、今まで暗んで居た目が直に開いて、立派に見える樣になつた。彼等は一度や二度叫んだゞけに止らず、家の中にまで隨いて行つて叫んだから、癒して戴くこと出來たのである。今も主は我等の困難を知らないものゝ如く、我等の叫を聞かないものゝ如く見せかけ給ふことが往々ある。然し知らず顏で居給ふかの樣で、實は明に見拔き給ふ。聞えぬ振りで居給ふかの樣で、實は飽まで知り拔いて居給ふのである。熱い信仰、深く信賴むの心を以て、止みなしに祈つたら、必ずお聽容れ下さるに相違ないのである。

殊に聖母の御傳達を賴め。母の慈仁に縋らぬ子が何處にあらう、聖母は如何なる母も及ばぬ慈仁と權威とを有つた御母である。御前に駈寄る兒女を一人として御見棄てにならない。聖母は曉の星に在して、絕えずその優しい柔かい光

を放つて、信仰の本源たるイエズスの方へ我等を導き給ふ。我等は信仰上から言へば、盲者も同然であるから、聖母の御前に平伏して、我等の心の眼を開けてイエズスを明に認めさして下さる樣、一心に嘆願せねばならぬ。

(2)—心を暗になすまい、怖ろしい嵐に吹き捲くられまいと思はゞ、務めて邪慾を抑へ、罪を避けるに限る。清淨は己を照らし、人を照らす光明である、殊に青年處女の爲に何よりも美しい裝飾である、何よりも貴い寶物である。然しこの寶物を保存つて行くと云ふのは、譬へば火の海を涉りながら火燒をしない、劍の山を踰えながら怪我をしない樣なもので、隨分と注意を深くせねばならぬ、猛烈しい戰をも交へねばならぬ。だが心掛け一つでは決して不可能ではない。

聖カロロ、ボロメオがパウイアに遊學して居られる頃、學生は皆腐敗し切つて有德の青年と云ふは雨夜の星よりも少く、何時も何處にでも危險が襲ひ來る

のであつた。然し他の學生が劇場に、酒場に、怪げな料理屋に入浸りして居る間に、聖人は獨り祈禱と勉強とを續け、以て身も心も清淨に保つて行くことが出來た。サレジオの聖フランシスコもパドアに遊學して居られる頃、同樣な危險に出遭したものである。聖人は務めて惡友に遠かり、熱心に祈り、熱心に勉強し、毎週必ず告白をして居られた。不良學生等が夫れを煙たがり、何とかして聖人を腐敗せしめんものと、一日欺いて聖人を良からぬ婦人の家に連れ込み、自分等は密つと出て了つた。然し聖人は直に婦人の顏に唾を吐きかけ、頭に燃え差の薪を投げ付け、よつて以て危險を遁れることが出來た。之を以て見ると罪に倒れ込む者は自ら好んで倒れ込むのだ。自分の心さへ確りして居れば、何んな誘惑がやつて來ても、負ける憂はない。殊に聖人の如く鋏の樣な決心を持て居る上に、毎週一回、或は少くも二週間に一回づゝ告白し、屢々聖體を拜領し、猶聖母マリアに縋つて、その御保護を祈ることを忘れないならば、決して

倒れる氣遣ひはないものである。たとひ如何なる災難の暴風が吹起つて來ても、たとひ如何なる誘惑の大浪が打突つて來ても、たとひ如何なる絶望落膽の淵に沈み入りさうになつても、一たび眼を擧げて、この曉の星の清い優しい美しい光を仰ぎ見たならば、自づと希望が湧き、元氣が立戻り、誘惑は逃れ去つて、清い思、美しい望、優しい感情が萠んで來るに違ひないのである。

(3)—終に此世は涙の谷である。憂苦、悲哀、災難、失敗の包圍攻擊を受けて、心が眞暗黑となり、何を何うして可いか分らない樣になる事も珍らしくはない。斯る場合に慰安となり、力となりて、行くべき道を指示してくれるものは曉の星たる聖母ではあるまいか。

辛い病に取付かれ、夜中一目も眠れない時などは、明け易い夏の夜でも、非常に長い樣に思はれる。眞闇な暗を冒して旅行をして居る時、荒い浪風に揉まれ〳〵て航海をして居る時などは、さア東が白んで來た、曉の明星が見え出し

たぞと云ふ時ほど嬉しいものはない。邪慾の暗に惱まされて居る我等の爲に、惡魔の誘惑の風に吹き捲られ、世間の怖ろしい荒浪に揉まれて居る我等の爲に病に苦み、貧苦に悶え、災難に泣いて居る憐れな我等の爲に、聖母は何よりも嬉しい曉の明星ではないか。さうした苦痛、悲哀に壓倒され、早く死んでも了ひたいな！と思ふ樣な時にでも、もし聖母に賴り縋る氣になつたら、一心に聖母の御名を呼んで、その御憐を祈つたら、聖母は必ずその優しい、柔かい曉の明星の光を送つて、我等の心を慰め、氣を取直さして下さるのである。

斯樣な次第で、我等は何時も〳〵この曉の星なる聖母を仰いで居なければならぬ。誘惑の霧に包まれ、罪の暗黑に閉されて居るならば、早く聖母に縋つて、信仰の眼を睜き、罪の暗黑を拂ひ、冷淡、不熱心の眠を醒さう。さすれば良心の空には必ず清い、優しい曉の星の光が射込んで來る。莞爾と微笑むが如き聖母の御姿が仰がれる樣になる。既に聖母の光を仰いで居る、心に疑惑の曇も、

大罪の暗黑も懸つて居ないとすれば、實に慶たい次第であるが、然し夫れだけに滿足してはならぬ。曉の星が現れ出ると、東の空は次第に白み渡り、刻一刻と明くなり、美しく色付いて來るものである。我等もいよ〳〵深く聖母を識り、益々深く聖母を尊び愛して、その清い光に照され、その優しい御手に導かれ、進み進んで、正義の太陽なるイエズスを仰視るの幸福を得なければならぬのである。

（實例）—ベルナデッタの初聖體——ベルナデッタは未だ初聖體を領けて居なかつた爲め、學校で授業を終つてから、熱心に公教要理を學ぶのであつた。然し彼女の智慧は到底十人並にも達せず、鋭く、明るい答などは望むべくもない。たゞ異る所は彼女ほどイエズスを愛するものなく、彼女ほど熱心に祈るものがないと云ふ一點であつた。

斯くて六月三日ベルナデッタは學校の聖堂で初聖體を受けた。此日彼女は洞

窟に於けるが如く、氣を奪はれて恍惚となるだらうと人々は期待して居たが、然し神は、彼女の魂の美さが、内心のおに止り、そが外部に顯れるのを欲し給はなかつた。彼女は極めて恭しく聖體を拜領し、深い喜びの情を面に表ーながら感謝するのみであつた。

後でエストラド嬢はベルナデッタに向ひ、御聖體を拜領するのと、洞窟で聖母とお話するのと、何方が嬉しいかと問うた。ベルナデッタは暫く考へた上で「私存じません。此等は相並んで行くべきはずのもので、比較することは出來ないのです。たゞ私は何れの場合にも、ほんとに嬉しうムいます」と答へた。

思ふに聖母は曉の星に在して、正義の太陽なるイエズスの先驅となり、世の暗を拂ひ、人々の心を照らし熱めて、その正義の太陽を受け奉る準備をなさしめ給ふのである。さればベルナデッタの如く、聖母に照され、導かれ、御目を注がれ、いたく愛された者は、またイエズスに憧れ、イエズスを慕ひ、

その愛の甘きに陶醉するに至るのは、見易い道理で、その何れが樂しく慕はしく覺えられるか、容易に見分けがつかないのも不思議ではあるまい。

第二十六日　病人の回復（其一）

（1）—指を傷けた、腹が病み出した、頭痛がして堪らないと云ふ時、子供は早速母に向つて叫ぶものである。

我等の一生は疾病、痛苦の連續と謂つても可い位で、何かの病を有たない人と云ふは誠に少い。そして愈々現世を立つと云ふ時には、苦んで苦んで、非常に苦んだ揚句の果に死んで行かねばならぬ。幸に我等は天に慈愛の御母を有つて居る。生ける間も、死する時にも、この御母に向つて叫を擧げると、必ずお答へ下さる。聖母は實に病人の回復で、この御母に縋れば、痛苦を慰められ、

病までも往々〳〵癒され、死出の旅路の道伴とさへなつて戴けるのである。

疾病や痛苦は罪の罰である。世の始め、人祖が罪を犯した時、神の御口より宣告された罰である。神はアダムに向ひ「汝は額に汗を流して汝のパンを食せよ」と曰ひ、エワに向つては「我は汝の痛苦を多くなすであらう」と仰せられた。してこの宣告は獨り人祖の身の上のみに止らない、後世子孫にまで及んで來た。であるから如何にジタバタしたからとて、到底之を遁れること出來るものではない。

聖パウロの如く熱い信仰に燃え立ち、心の底から神を愛し、面りに見奉つて居るかの樣に、親しく神と交つて行ける人ならば、「我は立去りてキリストと共に在ることを望む」と叫び、そして實際自分の肉が崩れ落ちるのを見て一方ならぬ喜悅を感じるものである。この泥土の家が崩壞れた御蔭で、今まで中に閉ぢ籠められて居た私も、始めて自由の身となり、天の大宮に飛んで行き、永遠

窮りなき幸福を樂めるのではないか。實に私の靈魂は籠の鳥見たやうに、この肉體内に囚れて居るのだが、幸ひ疾病が痛苦の大斧を振つて、この籠の戸を叩き破つてくれるので、もう軈て自由の天地に駈け廻られる、あゝ嬉しい、と喜ぶのである。然し、かうした如何にも高尚い感情は、誰でも容易に起し得るものではない。大概の人は隨分と疾病の爲に苦まされ、氣も辛々となつて來るものである。

花も盛りの青年、處女があつたとしよう。身體は壯健で、容姿は美しく、洋〳〵たる希望の光は前途に漾ひ、やれ快樂じや、名譽じや、幸福じや、とたゞ夫ればかりを夢みて居たのに、一朝疾病の手が其肌に觸れたかと思ふや、忽ちその盛な元氣は衰へた、その壯健な身體は弱り切つた、その美しい容姿は窶れ果てた、人はみな跳ねつ、躍りつ、笑ひ戯れて居るのに、自分ばかりは苦しい床に横つて、ウン〳〵呻つて居る、跳ねもされぬ、躍りも得ない、笑ひ戯れるこ

とすら出來なくなつたのである。

疾病は實に苦しいものである。容姿の窶れ果てるのを見て居なければならぬ。ひよつとすれば我身の崩壞れて死んで行くのさへ眺めねばならぬかも知れぬ、活きる爲にこそ現世に生れたのに、今や其生命は刻一刻と逃げ去つて行くのだ。快樂を貪りたいと思つて居たのに、その快樂も早や自分の手を逸れ去つた今や希望の光は全く消え失せた。前途は眞暗となつた。狼狽へずに居られようか。悶へ惱まずに居られようか。

然し其樣な時には、少しく眼を擧げて病人の回復たる聖母マリアを仰ぎ、信仰の光を嘆願するが可い。靈魂の眼が暗んで居るから、之を明して下さるやうに祈るが可い。左すれば今が今まで、たゞ苦しいもの、厭なもの、とばかり思つて居たその疾病も、實は一方ならぬ神の御惠であつたよと分つて、寧ろ其疾病を與へられたのを衷心から感謝する樣になるであらう。

(2)—考へても見よ、我等は是まで傲慢であつた。自分の容姿を傲り、自分の財産を鼻に掛け、獨で豪がつて居た。すべての世界が我等を中心として廻轉するかの樣に思つて居たものだ。名譽や快樂やの乳香の煙が我等の腦髓に立昇つて、我等を發狂させ、次第に滅亡の途に引張り込んで行くのであつた。我等は實に寒心るべき危險にさし掛つて居たのである。

然るに神は我等をお見棄て下さらなかつた。我等が不注意をした序に、突然我等の身に疾病を與へて、その危險な滅亡の坂を下りつゝあつた足をお引止め下さつた。我等も最初は呟いた、泣き叫んだ、然し病の床に臥せりながら、ぢつと考へて見た。祈りもした。すると自分が盲滅法に駈つて居た途の行詰りは底知れぬ深淵であつたよと氣が付き、屹驚りして後退りした。「若し主がこの病をお與へ下さらなかつたら、私は如何なつたでせう。一寸も氣が付かないで、地獄の途をひた走りに走つて居たのでした。あゝ主は私を天國の途へ引戻

して下さいました、有難い！　有難い！」と衷心から感謝するに至らないだらうか。

（3）—幾夜も〳〵眠り得ないで、左に右に寢返り打つて夜の明けるのを俟ち焦れつゝある間に右樣な事を考へたら、如何なる慰藉を覺えるだらうか。況んやさうした時分には、何人の胸にも聖母マリアに縋るの念が自然と浮んで來る「病人の回復なる聖マリア、我等の爲に祈り給へ」と、誰れ勸めるとなく叫ぶ樣になる。すると聖母は屹つと慈母の優みを以て駈け附けて下さる。その痛苦を和げ、その悲哀を慰め、氣强く堪へ忍ぶ力をお與へ下さるのである。ルドヴイナ聖女を見よ、三十幾年の間も怖ろしい疾病に惱み、甚い〳〵苦みに悶へて居たものである。痛苦の堪へ難くなる毎に、病人の回復なる聖母の御助を求めると、聖母は屢天使を遣して、その痛苦を和げて下さるのであつた。時としてその美しい天使は聖女を伴つて、聖母の御膝下に案内し、聖母が天國の

花の馥郁たる芳香を放つ中に、左も樂しげに御安息み遊ばす園の中を漫歩きさして下さる。或は煉獄に連れ下つて、多くの靈魂が怖ろしい苦罰を受け、其罪を償つて居る狀態を面りに視せて、現世に居る間にその病苦を煉獄として罪の償を果す氣になして下さることもあつた。すると聖女は其都度言ふべからざる慰悅を覺え、餘りの嬉しさに、自分の視たり、聽いたり、味つたりしたことを物語ることすら出來ない程であつた。たゞ天國の聖人等が「ルドウイナさん、世の苦痛を氣强く堪へ忍びなさい、我々も地上に於て苦んだのです、戰つたのです。然も今では如何な安息を、如何な平和を樂んで居ますか。夫れも永遠に亘つてゞすよ」と仰しやつた語を繰り返すのみであつた。

斯の如く聖母を愛する人は、疾病に罹つても、決して氣を辛立てない、靜に病人の回復なる聖母の御扶助を呼び求める。すると苦しい中にも信仰の眼が開いて來て、今まで見えなかつた所を明に認め、心は言ひ知れぬ喜に躍り立

つに至るものである。

（實例）—第十九回出現——七月十六日はカルメル山の聖母の記念日で、ベルナデッタは聖體を拜領し、午後も天主堂に參詣して感謝の祈をして居ると、洞窟に來れ、と云ふ聲が突然心に響いた。早速バジル叔母の許へ走せつけ、請うて相共にマッサビエルへと赴いた。

時にタルブ縣の知事（ルルドは同縣に屬す）は、今度の出來事を以て笑ふべき迷信となし、命じて洞窟の周圍には柵を繞らさせ、人の近くのを嚴禁し、背くものには容赦なく處分を加へるのであつたから、二人は已を得ず、ガウ河の右岸なる牧場を指して急いだ。

時に多くの人々は牧場に集つて祈つて居たが、ベルナデッタが來たと見るや皆席を讓つてその周圍に集つた。

ベルナデッタは徐に其處に跪いて祈り始めたが、其顏は俄に生動し、晴

やかとなり、超自然の光に輝き、さも喜ばしげに

「さうです、さうです、其處に居られます。其柵の上から私等に會釋し、微笑んでいらしやいますよ」

さう云つたまゝ彼女は口を噤み、聖母と神秘的な談話に入つた。もう彼女の爲には、ガウ河も、マッサビエルの巖も、木柵も一切消え失せて了ひ、たゞ一心に聖母を打眺めて居る。その明るい、柔和な御顏を眺め、その天上的微笑に氣も心も奪はれて居る。三ケ月以上も見え給はなかつたので、幾ら眺め入つても飽き足らず思ひ、一時は身を起して、聖母の力へ飛んで行き、永久にその御腕に縋りつきたい氣持すら覺えるのであつた。

今度こそ最後の御出現であつたのだけれども、聖母はベルナデッタを悲ませない爲に、袂別の辭は述べ給はなかつた。たゞ何とも知れぬ溫和な御姿を示し、溢れん許りの慈愛を湛へた御目を以てベルナデッタを見詰め、日も早や西

の山の端に沒れようとする頃、靜に消え失せ給うた。

聖母の優しい、言ひ知れぬ御顏、その限りなき慈愛を湛へた御眼元、たゞそれを思つたばかりで、苦しい病、堪へ難い惱みに沈める人でも急に元氣づき、活き返つた樣に覺えるものである。で我等は何時も聖母を思ひ、聖母を愛し、聖母に叫び、その御助、その御憐を祈ることを忘れない樣に務めよう。

第二十七日　病人の回復（其二）

（1）—聖母を呼んで病人の回復と申し奉るのは、聖母が病苦を凝つと堪へる力をお與へ下さるからである、體の苦によつて、心の病を癒して下さるからでもあるが、然したゞ其爲め許りではない。聖母は屢體の病までも癒して下さる。聖母が御存命中、何等かの奇蹟を行はれたとは、聖書の何處にも記し

てない。御子御昇天の後には、御子の後を承繼いで、總ての病人を癒し給うたであらうと言ふ人もあるが、夫れとても一個の想像たるに過ぎない。然し天に御昇りになつてからの聖母は、絶えず病人の回復となつて、その感ずべき御情驚くべき御威力を現はし給ふのである。實に聖母の御名によつて與へられたる總の噂高い全快、非常特別の御惠は、到底數ふるに遑ない程で、今日ルヽドに於て行はれる奇蹟を以て見ても、聖母が如何に御情厚く在すかを察するに餘あるであらう。だから病に罹つた時は、醫師の診斷を受け、その藥を服用まなければならぬが、其間にも病人の回復たる聖母に縋るのは、決して無益ではない。況して醫師には匙を投げられ、到底回復の見込なし、と宣告された病人に在つては、病人の回復たる聖母を措いて何處に賴の綱を投掛ける所があるであらう。

然しながら聖母に縋りさへすれば、何時でも何んな病でも回復すると極つた

ものではない。「生ある者は必ず死あり」一度は是非とも死なねばならぬ身の上である。幾ら脈がつても、幾ら衛生に注意して居ても、幾ら天下の名醫を抱へ、世界の靈藥を服用ひて見ても、神の思召し給ふ時が來たらば、何うせ死んで行かねばならぬ。聖母マリアでも、病人の回復と仰がれ、擧げて數ふべからざる程の病人を回復さして下さる聖母マリアでも、やはり御死去あそばしたではないか。たゞ聖母は死を怖れ給はなかつた、寧ろ生を輕んじ、死を冀つて居られた。御子の御昇天遊ばしてからも、御自分は猶長く現世に止つて御子のお遺になつた事業を繼續けて行かれた。然し其間にも御子に遠つて居ることを如何にも心苦しく思ひ、一日も早く御子の御側へ駈け行きたいものと、始終望みに望んで居られたのだから、死ぬのは何よりの喜悅であつたのである。

我等も聖母の如く生々たる信仰に燃え立つて來たらば、暗い死の蔭が前に迫つても、怖れて逃げ出す樣な事はあるまい。死は我等の爲に天國の門を開いて

くれる。我等と神との間を遮つて居る隔の幕を切つて落すのである。預て尊び愛して居た方々の側に我等を案内してくれるのである。怖れたり、厭がつたりするよりか、寧ろ之を望み、之に憧れる筈ではあるまいか。

我等が「死」と云ふ語を耳にすると、覺えず背中が悚然として來るのは、心が世間の慾に執着して居るからである。天國を失はうと、イエズスに背かうと、そんな事は一切お構ひなしに、たゞ〳〵お金を儲けたい、偉い人物と言はれたい、身を樂ましたい、と許り考へて月日を送つて居るものだから、死ぬのが非常に怖ろしい、そのお金も投棄てねばならぬ、其名譽も煙と消え失せねばならぬ、其快樂も夢と破れねばならぬ、厭がるのは無理も無いが、然し幾ら厭がつたからとて遁れられる運命ではない。何うせ極つた時に、極つた通りに、極つた處で死んで行かねばならぬ。

(2)—猶我等の爲に死ぬのが怖ろしいのは、罪を犯して居るからである。爲

すべき善業を怠り、爲すべからざる惡事を働いて居るからである。隨つて自分の前途が案じられる。天國であらうか、地獄ではあるまいか、主と共に永遠無窮に樂むこと出來ようか、惡魔や惡人輩と共に何時までも〳〵苦むことになりはしまいか、夫が何うも氣遣はしくてならぬのだから、一向死にたくない、「死」と云ふことを考へたくもないのである。

然しながら何を何うしたからとて死ぬべき時が來たらば、是非とも死んで行かねばならぬのだから、死を厭がるよりは寧ろ安んじて死ぬ用意をして置いた方が得策ではあるまいか。影と云ふものは形が寫るので、形が圓ければ影も圓く、形が歪んで居れば影も亦た歪んで寫る。人の最後も其一生の影たるに過ぎない、一生の行が正しければ、最期は屹と眞圓いが、一生の行が歪んで居れば最期も多くは歪んで寫るのである。で聖母の如き、安かな終を遂げたければ、聖母の如き行動をするより外はない、聖母の如く世間の慾に心を縛られな

い樣に務めると共に、また聖母に倣つて、惡を避け善を勵まねばならぬ、罪と云ふ名の附くものは、たとひ一寸した事でも爲ない樣に注意し、一方からは其身其身に應ずるだけの善を修め、德を磨いて行つたら、今死ぬと云ふ段になつても、何一つ心に掛る所はあるまい。

(3)—固より我等は修道者ではない、朝も晩も、信心に沒頭り込んで居る譯には行かない。聖母だつて然うではなかつたか。家を持ち、子を持つて居られた、夜も晝も祈禱ばかりして居られた筈がない。賄もされたらう、拭掃除もされたらう、洗濯でも、裁縫でも、其外婦人の爲すべき事は何でもなさつたに相違ない。たゞ其んな事をする中にも、神を忘れず、何事も神を愛する心で以て遣つて行かれたから、何んなに僅な行でも、夫が皆大なる功德となつた、我等も各自の境遇に應じて盡すべき務を忠實に果し、万事主の御旨に適ふべく務めたら、夫で意外の功績を積み、安全なる最期を遂げることが出來ないだら

うか。

其上、一生涯聖母を尊び愛し、その御心を心とし、その御手本に倣つたら、聖母は必ず我等を保護して下さる。聖母に縋つて居るのは、強い錨に繋がれて居る様なものだ。聖寵の港、德の港、救靈の港に繋がれて居て、何時になつても動くことなしであらう。していよ〳〵臨終の鐘の打鳴される段になるや、聖母は必ず我等の枕頭に近き、我等の死の惱みを慰め、强め、勵まして下さる。終に最後の息を引取るや、直に我等の靈魂を受取つて、神の御前に進め、「是は私の愛子の靈魂でムいます。一生涯、私を尊び愛したものですから、何とぞ母子が引離されない様、お願ひ申上げます」と言つて下さるに相違ない。斯くて病人の回復なる聖母は、亦、臨終者の慰安となり、たとひ其病を癒して下さらなくとも、是から病うことも、死ぬことも無い幸福な身の上となして下さるのである。然うなつたら、我等は如何に喜んで、諸〳〵の天使、聖人等と共に聖母を讃

め、その御憐を稱へ、「あゝ病人の回復なる聖母よ、千代に八千代に祝せられさせ給へ」と歌ひ囃すに至るであらうか。

（實例）—聖母の出現の總括——最初十二回出現まで、聖母は基督教生活が祈禱や、罪人にたいする同情や、贖罪、犧牲やに存することを敎へ給うた。我等は各、自分の心に小聖堂を建てなければならぬ。この小聖堂は司祭を棟梁として謙遜の基礎の上に築かれる（第十二回出現）、してこの建築に用ふべき器械はロザリオで、第十三回出現に聖母はその旨をお諭しになつた。

終に當世の最大病根は自然主義、個人主義、及び人目を憚るの念に在る。それを打破するが爲め、聖母は「人が行列して來ることを望む」と宣うた。斯くて聖母は團體を組み、一緒に祈り、一緒に歌ひ、一組に禮拜することを我等に敎へ給うたのである。

然し現代の病弊を根治すべき靈藥は、無原罪の聖母にたいする信心である。

ル、ド出現の目的はそれに在つた。マリアは世の終まで惡魔の頭を踏み碎き給はねばならぬ。今日惡魔は唯物論者となり、自然主義者となり、超自然を否定し、キリストを否定し、その教會をも否定し、原罪をも否定して、やたらに科學を稱讃し、物質を神に祭り上げて居る。然るに聖母は「我は無原罪のやどり也」と宣言して、原罪の存在を肯定し、その原罪を滅す爲に神の御子が人となり、教會を建て、その救世事業を經續せしめ給ふことを明にせられた。隨つて無原罪の御やどりを信ずると、またキリストを信じ、教會を信じ、その救世事業を信じ、以て惡魔の頭を踏み碎き、當世の病根を刈除くことが出來る譯である。

であるから平生篤く聖母を賴み、殊に臨終の際には聖母の慈悲深き御腕に縋るならば、聖母は必ず我等を憐み、助け、勵まし、我等に微笑み給ふに相違ないのである。

第二十八日　罪人の依托（其一）

（1）—聖マリアの連禱の中で、我等の耳に最も嬉しく、心地よく響くのは罪人の依托と云ふ稱號であらう。我等は皆罪人である、心の定まらない、惡には傾き易い、倒れては起き、起きては又倒れると云ふ樣に、極めて弱い、淺間敷い罪人であるから、思はず識らず目を聖母の方へ擧げて、「罪人の依托、我等の爲に祈り給へ」と叫び出すのである。

聖母が罪人を愛し給ふのは、何うした譯であらうか。淸淨にして一點の汚もあらせられぬ聖母が、如何なれば罪に汚れ、惡に黑ずみ渡つた男を愛し給ふのだらう。童貞の中に最も聖なる童貞にて在しながら、如何なれば不品行に身を持ち崩して、腐り果てた女を可愛がり給ふのであらう。

思ふに聖母は救主の御母である。「我が來りしは、義人を召ぶ爲にあらず罪人を召ぶ爲なり」（マテオ九ノ一三）と曰ひ、罪人と飲食を共にし、彼等に優しい愛情の範れる話を聞かして、其罪を悔い悛めさせ給へる救主の御母である。而も御子の生寫とも呼ばれ給ふまでに万事御子の御鑑に則り奉れる御母であるから、亦御子の如く罪人を愛し給ふのも怪むに足りない。兎に角、イエズスは限りなき御憐の神、して聖母は其イエズスの御母にて在す以上は、亦必ずその憐せぬ御憐の泉に汲んで、御自分も非常に御憐深くならせ給うたのは疑を容れない。で聖會は特に聖母を呼んで、聖寵の御母だの憐の御母だの、と申し奉るのである。

（2）—聖母は憐の神なるイエズスの御母たると共に、亦我等の御母である。カルワリオは十字架の下に於て我等人類の御母とならせ給うた其時から、神は特更に慈愛深き母の心を與へて、その新らしい任務に從事せしめ給うた。所で

其時カルワリオに居合せた人々の中には、善人は極く僅少で、殆ど皆が皆、罪人ばかりであつたから、聖母が人類の母とならせ給うたのは、取も直さず罪人の母とならせ給うた譯で、特更ら罪人を可愛がつて下さるのは誠に故なきにあらずである。

猶聖母は義理上からして罪人を愛せずには居られない、と云ふのは、聖母が救主の御母、と云ふ世界に又なき名譽を戴き、古今に例なき尊位を忝うし給うたのは、全く我等罪人が居たればこそである。若し人類が罪を犯さなかつたなら、世に救主の御降り遊ばす必要があらう筈もない。あれほど偉大なる救主がお降り遊ばしたのは、そして聖母がその御母となるの榮譽を擅にし給うたのは、實に人類が罪の淵底深く墮落んだ爲である。故に聖會はアダムの罪を呼んで、「おゝ福なる過失よ」と曰つて居る位。隨つて聖母も我等故に斯る驚くべき特典を忝うし得たのだと思ひ給うては、何うしても我等を憐まずには居

られないのである。

斯様な譯で、聖母は現世に在す時から、深く罪人を愛し給ふのであつた。況して天に昇り給うてからは、其愛熱が冷めよう筈がない。我等のすべての難苦を打眺め、我等のすべての嘆息をお聽き遊ばすや、直に神の尊前に平伏して御傳達ぎ下さる。その神の御母の權威を以て、我等の爲に周旋して下さる。して一たび聖母が御傳達ぎ下さつたら、御子と雖も無下にその願を退け給ふ筈がない。だから聖母に縋つて御扶助を求め、御傳達を願つた者で、聽容れられなかつたと云ふは古より今に至るまで、未だ曾て聞かざる所だ、と聖ベルナルドは斷言されて居るのである。

聖母は天にお昇り遊ばしてからも、その言ふに言はれぬ福樂に陶醉して現世に泣いて居る我等を忘れ給ふ樣な事は決してない。現世に在す時から、言に餘る御親切を抱いて居られた。況んや天に於て神はその御親切を一層廣く大くな

し、前にも幾倍かけて我等を愛さして下さるのに、何うしてこの涙の谷より泣き縋る我等を御見棄てになる筈があらうか。

聖母は彼所より我等を御覽になる。我等の祈禱にお耳を傾けて下さる。一人でもお忘れにならない、天國は物忘れをする處ではない、忘れる樣では眞に愛して居ないのだ。却つて天國での愛は擴張るばかり、熱灼くなるばかりだから片時でもその愛し給ふ我等罪人を忘れ給ふ樣なことはないのである。

(3)—兎に角、聖母は罪人を愛し、彼等が御名を呼び、御前に駈け寄るのを深く望み給ふ。子供が怖ろしい物を見て、直ぐ母の紬に縋り付くが如く、罪人が御自分に縋つて御助力を祈るのを、篤く〳〵望み給ふのである。

イエズスはゲツマニーの園に於て、御祈禱をなし給ふ時、弟子の中でも取分け忠實で、熱心なペトロ、ヤコボ、ヨハネの三弟子を伴うて中へ進まれた。然るに彼等は御祈禱の間に、コクリ〳〵と居眠を始めた。「誘惑に入らざらん爲

に醒めて祈れ」(マテオ二六ノ四一)と御注意を受けて目を醒ましては醒ましても、又直に深い眠に落込んで了つた。其爲に終には主を見棄てゝ逃げ出したり、「知らぬ。存ぜぬ」と三たびも否んだりする樣な始末に立至つたのである。

斯うなつたのも實は聖母が共に在さなかつたからである。若し聖母が共に在したら、彼等を勸め勵まして、イエズスと共に祈らせ給うたに相違ないので、彼等とても到底さうした居眠なんかされた筈がない。御子の御昇天後を見給へ。弟子等は橄欖山を降つて宿に歸るや、十日の間も聖母と共に心を合せて祈つた。聖母が弟子等の傍に在して、彼等に御鑑を示し、彼等を勸め、勵まして祈らせ給うたからではあるまいか。前には一時間も祈り得なかつた彼等が、今や十日間と云ふものは熱心に祈り續け、以て聖靈の賜を豐に蒙り、全く見違へた人物になることが出來たのである。

聖母はたゞ我等を勸めて、主に祈らせ給ふのみならず、亦御自分にも祈らせ

給ふ。我等の思を、我等の案じて居る所を、密に望んで居る所までも、主の御前に御達け下さいませ、と願はしめ給ふのである。子供は母に何一つ隱し立てをしない、されば我等も何から何まで打開けて申上げよう、自分の力の弱いことも、罪に傾き易いことも、誘惑の激しいことも、自分の愛して居る罪人が一向改心しない爲に感ずる胸中の悲までも、殘らず申上げて、御周旋を求めよう。さすれば聖母は必ず我等を御助け下さる。お護り下さる。我等の弱い腕を支へて下さる。聖母は深く罪人を愛し給ふ。その御權力は非常に大きい、惡魔すらも謙つて聖母の御援助を求めたら、聖母は爲に神の御憐を乞受くるを得給ふと云ふ程である。されば我等が如何なる罪に溺れて居るにせよ、深く賴むの心を以て、御前に縋りつきさへすれば、御助け下さらぬ筈は無いのである。

(實例)—司教の調査——この年の七月二十八日、タルブのラウランス司教

は、ルルド出現に關する調査委員を指名した。委員は十一月十七日ルルドに出張して、ベルナデッタを召出し、出現の事實を細々と問ひ糺した。それからルルドの泉水によつて行はれた奇蹟を詳しく調査し、四ケ年の歳月を費して確實詳細なる報告書を調製し、それを司教の手許に差出した。よつて司教は一八六二年一月十八日その顚末を公にして

(1)—聖母マリアがマツサビエルの洞窟に出現し給うたことは確實なる事實であると信ずることが出來る。

(2)—ルルドの姫君を尊敬することを教區の信者に許可する。

(3)—出現の際、屢宣うた聖母の思召を奉戴して、我等は洞窟の邊に聖堂を建築すべし。

と聲明し、斯くて同年十月聖堂の建築に着手された。

翌年七月佛國リオンの美術學校教授ファビシ氏は、聖母がベルナデッタに現

れ給うたそのまゝの御姿を聖像に刻みたいと思ひ、下繪を作る爲にルルドに來て、ベルナデッタから種々の說明を聽き、斯くて出來上つた下繪を何回も見て貰ひ、然る後イタリアから最上等の大理石を取寄せて見事に彫刻した。その出來榮には誰しも感嘆せざるものなしであつたが、獨りベルナデッタは「これは誠に綺麗に出來て居りますが、洞窟の姫君には比べもつきません」と云つた。

四月四日ラウランス司教は二万人以上の參列者の先頭に立つて行列をなし、この聖像を祝別して洞窟の入口に安置された。

聖堂は聖母の現れ給うた巖の上と、その前と、地下と三つより成つて居る。地下の聖堂は一八六六年五月九日、ラウランス司教の手を以て祝別された。上の聖堂は一八七六年、前のロザリオ聖堂は一八九〇年に祝別された。

斯くて聖母の御望の如く聖堂は建立され、年々こゝに參詣する信者は幾百万の多數に上り、肉體的病を癒されるものも少からずあるが、特に罪を悔い、心

を改め、邪を去り、正に歸する者に至つては、全くその數を知らない。聖母は實に罪人の依托である。「罪人の爲に祈れ」と自らベルナデツタにも勸め給ひ、實際その洞窟の前に行はれる行列に參加し、一同聲を揃へてロザリオを誦へ、聖母の讃美歌を歌つては、如何なる罪人も聖母の御憐を蒙り、改心の道を辿らずには居られないのである。

第二十九日　罪人の依托（其二）

（1）—聖ベトロ、ダミアノは善き盜賊の改心を以て聖母の御祈禱の結果として居る。聖母が彼の十字架と御子の十字架との間に立つて御祈り下さつた御蔭で、彼は痛悔するに至つたのである。何故その前に痛悔しなかつたのであらう、何故イエズスがカルワリオへ登り給ふその後から隨いて行く中に、何故十

字架の重きに堪へずして倒れ給うた際に、彼の目が開かなかつたのであらうか。何故つて、夫は何とも分らないが、兎に角、彼の改心したのは、聖母が十字架の下に佇み給ふに至つてからである。彼が極惡の大盜賊より一躍して殉教者となつたのは、聖母が彼の爲に御傳達ぎ下さつたからである」と。

實に福音書を繙いて、吾主御受難の歷史を讀む人の心に異樣な響を與へるのは、イエズスが聖ヨハネを眴せしつゝ聖母に向ひ、「婦よ、是れ汝の子也」と曰うた御言である。善き盜賊は聖寵の光に心を照されて、この御言の意味を十分に覺つたのではあるまいか。胸は張り裂ける思ひのせらるゝにも拘らず、我子の十字架の下に突立つて、呟かず、泣き崩折れず、ヂツと之を打眺めさせ給へるこの御母の優しく、健氣な御姿を眺めては、罪も汚もない母子の美しい心根が分ると共に、坐ろに自分の罪を恥かしく覺えて來たのではあるまいか。「あゝ私も斯うした優しい、親切な、氣高い母を持つて居たらば、この私の十字架

の下に突立つて、私を慰めて下さる様な母を有つて居たらば」と云ふ感が、自づと彼の心に浮んで來たのではあるまいか。

新に人類の母とならせ給うた聖母は、彼がさうした心になつて居るのを見給うた。彼が誠意から悔い悛めたい氣になりかけて來たのを見給うた。恐らく彼の兩眼から溢り落ちる涙をも見給うたであらう。そして彼の爲に、罪の赦と痛悔の惠とを御子に嘆願し給うたであらう。彼はイエズスが唾を吐き掛けられ、十字架の重さに壓倒され、カルワリオへと引立てられ、十字架に磔けられながら、一口も呟き給はず、チツと堪へ忍び給ふのを見たが、夫でも格別心を動かさぬのであつた。然るに聖母がさめ〴〵と涙に咽びながら、御子の十字架の下に突立ち給へるその痛ましい御有樣を打眺めては、痛悔の情は油然と湧き起つて來た。一人の盜賊が惡黨に加つて、イエズスを詛ひ出したと見るや、忽ち之を咎めて痛悔を勸め、自分はイエズスに向つて「主よ、御國に至り給はん時、我を記憶し給へ」(二三ノ四二)と願つた。彼の痛悔は衷心から迸り出たので、イエズスは直に「我誠に汝に告ぐ、今日、汝我と共に樂園に在るべし」と答へ給うた。

(2)—是が聖母に縋つて天國の門を開けて戴いた最初の罪人で、聖母の爲には如何なる喜悅の種子であつたであらうか。然し一人の盜賊が痛悔もせず、祈らうともせず、罪の中に固まつて動かないのを見給うては、亦如何に心苦しく覺えさせ給うたであらうか。聖母は決して無理强ひはなさらぬ。たゞ氣永く、親切にお勸め下さるのみである。その御勸めに從はない者は、彼の惡しき盜賊の如く、憫な死を遂げるより外はあるまい。

昔ヨズエはカナアンの地を征服してから、「避難所の町」と云ふのを定め、誤つて人殺をした者が逸早くこの町へ逃げ込むと、勝手に之を捕へること出來ないことゝ定めた。今聖母が正しく「避難所の町」で、この町へ走り込んだら

如何なる罪人でも、主の御憐を蒙られぬことはないのである。

成るほど我等の唯一の依托は、十字架に磔けられ給ひしイエズスである。けれどもイエズスの十字架の下に駈け付けるのは、何だか空怖ろしく覺えられる。血潮に塗れ、傷だらけとなり、苦しい、堪へ難い顏色をし給へるイエズスを仰視ては、何だか咎められる樣な心持がせぬものでもない。何を申すもイエズスを斯る姿になし奉つたのは我等である。我等の罪がその御手足に釘を打込み、その御血を瀧の如く流させ奉つたのである。イエズスは我等の父君ではあらせられるが、不孝な我等の爲に、かうして十字架に磔けられ、言ふにも言はれぬ御苦痛を忍ばせ給ふのである。家庭に在つても父の權威は多少嚴格に見える、殊に其父の權威が子女の爲に瀆された、侮られたと云ふ場合には、猶更ら然うである。父が怒つたと云ふ時には、一家擧つて顫ひ上る、今まで家の內に漾うて居た喜悅は、全く消え失せて了つたかの樣になつて來るものである。

斯る場合に子女の力となつてくれるものは母親である。母親はその悲しさうな顏にも一種の名狀し難い愛情を湛へ、「お父樣の御立腹は無理も無いよ」と言ひつゝも、自分が代つて子女の爲に謝罪をして下さる、父の怒を宥め、その赦を願つて下さるのである。

(3)—我等罪人の爲に聖母マリアが丁度さうした情深い母親ではあるまいか。で、主の御怒が怖ろしい時は、聖母の御前に駈けつけよう。その御膝下に泣き伏して、「罪人の依托、我等の爲に祈り給へ」と叫んだら、聖母は必ず御聽容れ下さる。兩の腕を擴げて我等を抱き上げ、御主に向つては、「私が此の子を引受けました、御怒を和げて下さいまし、此の子はもう私のものであります」と申上げて下さる。然うなつたら、主と雖も決して御拒絕りにならう筈はあるまい。

要するに聖母は罪人を愛し給ふ、盜賊さへも愛して改心さして下さつた位だ

から、如何なる罪人でも心を改めよう、罪惡の泥中を拔け出よう、と云ふ氣になつて聖母に縋りさへすれば、必ずお助け下さる。で我等は如何に怖ろしい罪に汚れ果て居ても、決して力を落さず、早速この情厚き聖母にかけつけて御憐を願ひ、御助を求める樣にせねばならぬ。

（實例）—ベルナデツタ修道院に入る——ベルナデツタはその後、父の家に留つたが、相變らず家は貧しく、十分の榮養を攝ることも出來ないし、朝から晩まで持病の喘息に苦められながら、訪問客に應接して、始終出現の出來事を物語らねばならぬので、いよ〳〵健康を害するのみであつた。ベルナデツタが通學して居た小學校はヌウエル童貞會の擔當にかゝり、別に病院をも經營して居たので、童貞等はベルナデツタの窮狀を憐み、父母に相談して、彼女を病院に引取り、靜養せしめることにした。

一八六三年、ベルナデツタも二十歲になつた。偶ヌウエルの司敎、嘗て日本

最初の司敎となり、病の爲にフランスに歸り、このヌウエル敎區を司牧し、ヌウエル童貞會をも管理して居られたフオルカド司敎は、病院を御巡視になり、ベルナデツタが貯所で野菜をむしつて居るのをちらと見て、その優しい淸い、無邪氣な眼付に氣を取られ、夕方應接間に呼入れて出現の事實を物語らせ、いよ〳〵感激の情に得堪へず、この信心にして、天眞爛漫な、聖母に甚く愛され し處女を世俗に遺し置いて、その童貞の淸さを曇らす樣な事にでもなつたら如何なるだらうかと思ひ、修道會に入る氣はないかとお尋ねになつた。ベルナデツタは是まで將來のことなど頭に浮べたことすらなかつたので、兎角の返答も爲し難く、「よく考へさして戴きたうございます」と暫くの猶豫を請うた。

一年餘を經て、いよ〳〵童貞になると云ふ決心がついたので、洞窟に參詣して淚ながらに最後の暇を告げ、それから親兄弟にも離別を述べ、二人の童貞に伴はれてヌウエルの母院に赴き、修練女となつた。

フオルカド司教は聖母の最潔き聖心に日本を献げた御方である。聖母が原罪の汚に染まず、自罪の傷を蒙らず、玉の如き潔さを保ち給うたのは、救主の御母となるべく選まれ給うたからである。して救主が世に生れ給うたのは、憐れな罪人を救ふ爲であつたから、隨つて聖母もまた救主の御母として、罪人や迷へる人を愛し、彼等に救靈を得せしめたいと一心に冀ひ給ふのである。我日本を聖母の最潔き聖心に献げ給うたフオルカド司教が、無原罪の聖母の娘たるベルナデツタを修道院に入れ、その童貞の清さを保たせ、罪人の改心を祈らせ給うたのは、何か其所に因縁がありさうに思はれてならぬ。何れにせよ、聖母は罪人の依托である。その原罪なくしてやどされ給うたのも、惡魔の頭を踏み碎き、罪を刈り去る爲であつた、我等は何時も〳〵この聖母に依頼まねばならぬ。

第三十日　憂き人の慰藉（其一）

（1）—人には何時も慰藉が必要である。たとひ今日は無事息災であつても、昨日通り抜けた不幸を思へば、胸も破れる心持がする。況んや明日は何んな災難に打突らぬにも限らない。始終慰めて、强めて、助けて戴かないでは、何うしてもこの涙の谷が渡れさうにない。で神は我等に慰主なる聖靈をお遣し下さつた。然し聖靈は聖の聖なる神で、罪に汚れた我等の中にはお止り下さらぬ場合が多い。であるから我等と同じ人間で、善く人情に通じ、而も非常な悲哀、痛苦に揉まれた經驗もある聖母マリアをば、憂き人の慰藉としてお與へ下さつたのである。

實に聖母は我等が一生の間の慰藉である。現世は涙の谷で、貧困や、苦勞や、

破産や、生離や、死別や、様々の迫害やと云ふ様な憂き苦みが、前からも、後からも右からも左からも押寄せて來て、息繼ぐ暇さへない位である。

先づ貧困は世界大多數の人が持つて生れた重荷である。たゞ信仰を持たない人は、この貧困を何よりの不幸と思ひ、之を甚く詛つて居る。貧困故に、世間並の快樂も享けられぬ、人には侮辱られる、才があつて伸ばすことが出來ない智があつても人に用ひられない。富豪が花に戯れ、月に嘯き、飲めや、歌へと空騒ぎをやつて居る間に、自分ばかりは汗水滴らして稼ぎ廻らねばならぬ。腹立たしい、同じ人間ではないか、我等ばかり斯んなに苦む筈があるか。さうした不平の焰をそろ〳〵胸に燃やし出すと、脇からは夫に付け込んで、油を注す奴が出て來る。彼等を煽動て〻一仕事してやらう、甘い汁を啜つてやらうと云ふ野心家が出て來て、いよ〳〵熾に煽り立てるものだから堪らない。小くては同盟罷工、大きくなると革命騒ぎとなり、國も家も轉覆して了ふ様な騒亂が

持上るのである。事の茲に至れる原因を尋ねると、つまりお金が欲しいからである、貧困が厭だからである、別に理由も何も有るのではない。なるほど今日では貧民救濟の方法は色々と講じられてゐる、勞働者の保護策も設けられてないではないが、然し貧の病を社會から全然取除けると云ふことは到底出來る話ではない。其身分〳〵に安じてさへ居れば何でもないのだけれども、矢鱈に上を望み、富豪の身を羨み、自分等も富豪の通りに、贅澤な眞似がして見たいと云ふ所から、幾らお金が取れても、救濟の方法を立て〻やつても、決して夫に滿足しない。彼等の慾望や底知れぬ穴も同樣で、何時になつても、夫を十分に埋めること出來るものではないのである。

(2)—たゞ之を救ふべき方法は信と望とを與へるより外はない。若し貧者が自分は他人の富を奪ふ權利を有たぬ、神の恵み給ふ所だ、たゞ骨を惜まずに働き、快く苦みを堪へ忍んで行つたら、必ず天に於て其報が得られる、神は貧者

の涙を量り、其汗の珠を數へ給ふのだ、と思つて見よ、夢にも不平など起らう筈はあるまい。

嘗てシトウ會の修道士等が畑に出て麥を刈り入れて居ると、聖母がお顯れになつて、丁寧に其額を拭ひ、黄金の杯に彼等の汗の珠を拾つて下さつたとか。たとひ肉眼にこそ聖母の御姿が見えないにせよ、日々の勞苦を主に献げ、神を怨まず、人を咎めず、セツセと働いて行く人の流す汗粒は、實に貴いものである。神の御眼には、富豪の指に光るダイヤモンドよりも、一層美しく輝くのである。「四百四病の中で、貧の病ほど辛いものはない」と昔の人は曰つて居るが、夫れは信仰も無く、希望もない人の話である。イエズスの御教を信ずる人の爲にに、貧の苦は如何にも堪へ易くなり、否な貴くなり、非常に有益となるものである。隨つて眞正の基督信者は、神の御攝理に信頼して居るから、左まで貧困を厭はない、よしや人に捨てられ、親戚朋友にも裏切られ、日々の生

計さへ立て難くなつても、十字架を打眺め、聖母の御名を稱へて、自ら慰める聖母はたゞベトレヘムに、たゞ厩の中に於てだけ、貧の辛さを知り給うたのだらうか。エジプトへさすらひ給うた時、ナザレトへお歸りになる時に限つて、その苦みを嘗めさせ給うたのだらうか。一生の間、貧しい世渡をし給うたのぢやあるまいか。隨つて御自分の如く貧困であり、而もその貧困に安じて行く人の爲には、十分にお世話をして下さらないだらうか。

カナの婚筵の場を思つて見るが可い、安が酣の頃、葡萄酒がなくなつた、夫を最先に氣付いたものは誰？、新夫婦だつたかと云ふに、さうではない、聖母であつた。して賴まれもせぬ中に、「もう葡萄酒がありませんよ」と云つて御子に奇蹟をお願ひになつた。御子は聖母の心中を汲み取つて、最初の奇蹟を行ひ、水を葡萄酒になして下さつた。斯う云ふ樣に我等が貧困に苦むと見るや聖母は必ず御子に向つて注意して下さる、苦しい中にも必ず慰安の葡萄酒を周

旋して下さるに相違ないのである。

（3）—聖母はすべて惱める人の慰安である。如何なる人をも御膝下へ招き、主の御言を其まゝ「私の方へいらつしやい、總て勞苦して、重荷を負へる人等よ、私が屹つと回復さして上げますよ」と云つて下さる。世間の人は豐な財産を貯へ、氣樂な暮がして見たいと望んで居る。遊惰に流れ、傲慢に陷り、酒色に溺れる危險があるにも拘らず、連りにさうした身分を羨しがつて居る。然しながら人は働く爲に造られた。人と生れた上は誰しもそれ〴〵に働かねばならぬ。そして神の尊前には、其樣に汗水たらして、セツセと働き、我身を養ひ人までも養つて行つてこそ、最も貴い、又最も稱な人となるのである。聖母も絲を紡いだり、機を織つたり、賄や洗濯や、拭掃除やをしたりして暮されたのだから、必ず其んな人の勞働を祝して下さる、そのお針や、編棒の働いた數から、洗濯の盥數までも、一々計算して下さる。神の爲、自分の義務の爲に、

指先を動かし、手足を働かした數だけ聖寵を與へ、祝福を與へ、慰安を報いて下さるのである。夕方になつて我と我胸に手を當てゝ、今日は主の爲に、片時も空しうしなかつた、骨を惜まず働いたよ、と思つたら、如何に嬉しく覺えられるだらうか。之に反して日一日、世間の空騷や無駄遊びに無我無中となり、夜に入つてから我身を顧みると、何にも殘る所がないならば、たとひ罪に汚れることだけはなかつたにしても、心は全く空虛である。甘い快樂の水は、忽ち苦い〴〵不愉快の酒となつて、堪へ難い煩悶を覺えるのみであらう。

然し一生の間には、誰しも胸は張り裂け、腸は千斷れる樣な悲しい場合に臨むことがあるものである。夫れは第一自分が滿腔の愛を傾けて慕ひ愛して居た人に振られた時である。「神の爲に、思召とあらば、愛する友を捨てることを學べ」とイミタチオには敎へてある。友に振られたり、忘れられたりしたのは、全く神の思召に由るのではないか。年の若い、經驗に乏しい時には、前後

の考もなしに、何人にでも親まうとする。接近いて來る人さへあれば、眞實な、品行の正しい、心の堅い、神を愛する人であるか否かを調べようともせず、經驗ある人に計らうともせずして、輕々と夫に愛着して、後に至つて、何かの機に振られたり、裏切られたりして、悔しがるものである。

交を結ぶ前に、先づ〳〵美しき愛の御母たるマリアに祈りて、その御光を求め、父母、司祭にも相談して事を決定める樣にしたならば、其樣に振られたり、裏切られたりする樣な憂はない筈である。然し幾ら何うしても、なほ人に突離されて、心も破れさうな目に遭ふ事が無きにしも限らない。斯る時には直に憂人の慰安たる聖母の御膝下に駈け付けるが可い。聖母も堪へ難い悲哀に遭はれた御經驗がある。聖母に依り縋り、思召に身を托せ奉ると、必ず其等の悲哀を和げる方法をお授け下さるに相違ない。

然し何が悲しいと云つても、自分の愛し愛されて居る人に死別れるより悲し

いことはない。夫婦親子、兄弟姉妹が仲睦しく暮して行くのは樂しいものであるが、神の思召によりて、その睦しい仲を割かれ、幽明所を異にすると云ふ樣になつた時は、如何にも悲しい限りである。でも致方はない、醫師と云ふ醫師には掛けて見た、何んな靈藥でも飲まして見た、手の及ぶだけは盡して見たが、夫れでも効がなかつた。斯る悲しい場合に我等の破れた心を慰め得るものは獨り聖母マリアである。聖母は必ず「泣くのでない。私が呼び取つたのです。もう私の傍に安心して居る。其方も一度は復た一緒になれますよ」と曰つてお慰め下さるであらう。

終に義の爲に、福音の爲に、自分の信仰を全うするが爲に、迫害に遭ふ、虐待められる時もあらう。さうした場合に聖母はいよ〳〵力を付け、慰め、勵まして、その迫害を喜ぶ迄に至らして下さるのである。

聖ヨゼフもさうして慰められ給うたぢやあるまいか。腕限り、根限り、働い

て一家を養つて居られる時、突然御子と御母の爲に、遠い他國へ流浪せねばならなくなつた。如何ほど疲勞もし、苦みもし、途方に暮れもし給うたか知れない。何處に雨風を凌がう、何うして親子三人が逃げ延ばう、助からう、口を養はうとも全く見當が付かないのであつた。然し聖ヨゼフはこの困難を逃がして下さい、この迫害を止さして下さいとは祈り給はぬ。イエズスを眺め、聖母マリアと言を交はすことが出來るだけでも、自分の爲には澤山で、夫によつて悲哀も苦痛も全く忘れ給ふのであつた。

斯の如く聖母は、何時、如何なる場合にでも、憂人を慰め下さるから、我等は憂苦、悲哀に襲はれる毎に、深く賴むの心を以て、聖母の御前に駈け付けねばならぬ。その優しい御情に絶らねばならぬ、「憂き人の慰藉、我等の爲に祈り給へ」と叫ばねばならぬのである。

（實例）——ヌウエルに於けるベルナデツタ——ベルナデツタがヌウエルに着

いたのは一八六六年の七月八日で、その二十九日着衣式を受けて修練女となり、修道名をマリー・ベルナルと稱した。

初め數ケ月間はベルナデツタの健康もよく保たれたが、やがて病の床につき一夜多量の血を吐いた。その報を得たフオルカド司敎は夜中駈けつけて終油の秘蹟を授け、長く祈り續けた上で、涙ながらに立ち去られた。院長は司敎を見送りながら「一つ遺憾に思はれるのは、彼女がまだ誓願を立てゝ居ないことであります」と曰つた。司敎は突然思ひついて、「何に！差支へありませんよ、聖母の特愛の娘ですもの、この幸福を與へませう」と云つて、病人の枕頭に取つて返し、「ベルナルさん、ルルドの聖母はまだ御滿足に思召されませんでせう。あなたが誓願童貞として天國に昇るのを欲し給ふに相違ない。心を取り靜めて、誓願を立てる準備をするのですよ、私の云つたことを分つたと身振を以て知らせなさい」と曰ふや、ベルナデツタは喜ばしげに天を仰いで、感謝の意を

表した。よつて司教は型の如く祈禱をなし、病人に代つて自ら誓願文を唱へられた。夫れからベルナデツタはスヤ〳〵と眠り、數時間の後眠を開いて、周圍の童貞等を見て微笑み、二口三口話をした。斯くて病氣もだん〳〵快方に向ひつゝあつたのに、其年の十二月八日に母のルイズ・スピルスが世を去つたと云云ふ通知を得て、彼女は悲嘆の餘りに卒倒した。「私は御前をこの世で幸福になすと約束しません、たゞ後の世に於て」と聖母の宣うたのが、こゝにも實現したのである。

一八七一年三月四日には父のフランソア・スピルスも永眠についた。ベルナデツタは父が如何に善良な人で、自分故に如何なる苦惱に揉まれたかを思ひ、愛惜の情に堪へず、涙は止めどもなく流れるのであつたが、然し父は信仰の人であつた、たとひこの世では面白からぬ日ばかりを送つたにせよ、聖母は「後世に於て必ず幸福たらしめ給うたであらう」と思ひ返して獨自ら慰めた。

要するにベルナデツタは聖母の特愛の娘でありながら、この世では絶えず病苦に惱され、種々の不幸に見舞はれた。たゞ彼女は憂人の慰籍なる聖母を愛しその御慈愛に縋り、その御慰藉に心を强められて、如何なる憂も悲も快よく堪へ忍んだものである。

第三十一日　憂き人の慰藉（其二）

(1)—聖母は憂き人の慰藉として、我等を慰め、身の痛みを和げ、心の傷を癒し給ふのである。母の手は優しい、溫かい情に燃えて居る。之に撫られ、擦られると、苦しい中にも言ひ知れぬ慰藉を覺えるものである。況して哀憐の御母、親情の權化とも仰がれ給ふ聖母が、親しく御手を下し、勞り慰めて下さるからは、如何なる憂苦、悲哀でも、和げられぬ筈がない。然し我等の爲に最

も苦しく堪へ難く覺えられるのは、いよ〳〵現世に永の暇を告げ、永遠の世界に向つて、發足せねばならぬ其刹那である。所で聖母は死ぬ時にも、死んだ後にも、やはり我等の慰めである。我等は毎日幾度も聖母に向つて、「天主の御母、聖マリア、今も臨終の時も祈り給へ」と叫んで居る。あゝ臨終の時、一切の物に訣れ、財産にも、地位にも暇を告げる時、現世の總の希望の絶え果てると云ふその臨終の時を、我等は何時になつても忘れ得ないで、その臨終の時にぢつと眼を注ぎ、彼の物哀しい發足に際して、我等の側に附添ひ下さる樣に祈るのである。聖母は我等のこの叫び、一生の間、幾千万度となく繰返して居る我等のこの叫びを御忘れになるだらうか。「哀憐の御母よ、彼の時に私は御身を唯一の賴みと存じまする」と、朝も晩も叫んで居るのに、其場を外して居合はしても下さらぬ樣なことがあるだらうか。如何なる母でも、斯くまで引つきりなしに、絶えず願はれながら、知らぬ顏を極め込んで居られる筈がない。況

んや世界中の母の情を一つに集めても、遙に及ばない程の熱い〳〵情に燃えさせ給ふ聖母が、我等の止みなしに叫んで居るこの祈願に、無感覺で居給ふとはどうしても思はれない。

嘗て聖フランシスコ會にアントニオと云ふ熱心な修道士が居た。重い病に罹り、今はの頃になつた時、彼は附添へる司祭に、「神父樣、私は來る土曜日に死にます。聖母に献げられた日に、マリア樣が御現れになつて、然う仰しやつて下さいました。私は夫を聞いて、嬉しくて〳〵堪りません」と物語つた。然しその嬉しさはホンの束の間で、其晩、惡魔は非常に怖ろしい形相をして、アントニオに顯はれた。アントニオは餘の怖しさに黄い聲を出して叫び出し、體はワナ〳〵と顫へて、今にも寢床から飛出さうとする。物音を聞付けて、兄弟等は駈つけ、一心に病人の爲に祈つて居ると、聖母は再びアントニオに顯はれて惡魔を逐ひ退け、懇に彼の心を慰め、御約束の如く恰當土曜日の夕方、御告の

鐘の鳴る頃に、安全として永い眠に就かして下さつたと云ふことである。

（2）—斯の如く我等が臨終の苦惱に悶へ、惡魔の加へる最後の突擊に弱り果てる時、聖母は何よりの慰安となり、力となり、救となつて下さる。平素聖母に厚く信賴んで居る人は決して捨てられる氣遣ひは無いものである。いよ〳〵最後の氣息を引取つても、聖母は決して我等を離れ給はぬ。私審判の廷にまで附添つて來て下さる。平生から熱心に祈つて〳〵止まなかつた其僕婢の爲に、辯護の勞を執つて下さる。聖會は臨終者の爲に「願はくはイエズス・キリスト、優しく喜ばしげなる御容姿にて汝に顯はれ給はんことを」と祈る。然しイエズスと共にマリアも慈愛の溢れる御手を伸して、彼の靈魂を受取り、之を伴うて神の法廷に立顯れ、十分同情ある辯護を試みて下さらぬだらうか。たとひ惡魔が我等の罪を數へ立て、神の正義に訴へ、その嚴罰を要求する樣な事があつても、聖母は必ず神の御情、御子の御救贖の功德、神の御母なる自分の權利

等を楯に取つて、御救護け下さるに相違ない。然うなつたら惡魔が死物狂ひの働も全く水の泡となり、我等は聖母の權能ある御手に護られて、安穩に天の御國へ辿り着くことが出來ないだらうか。

（3）—終に聖母は煉獄に苦める靈魂までも、憐めて下さる。煉獄は世間多くの人の考へて居る處とは違つて、非常に苦しい償の場である。天國の玄關見た樣な、天國の門が開いて內へ案內されるのを首を延して俟つて居る控所見た樣な處ではない。靈魂が最愛の神に遠づて、言ひ知れぬ悲嘆に沈んで居る處である。恐ろしい火に燒けて、罪の錆を落して居る處である。如何にも苦しい、如何にも怖ろしい處なのだ。隨つて聖母が御情を動かし、御力を振ひ給ふ餘地も夫れだけ多いのである。

嘗て一人の青年があつた。諸聖人の祝日の頃、その親しい友に死別れ、連りに悲嘆の涙にかき暮れながらも、一向彼の爲に祈らうとはしないのであつた。

吾主御降誕の祝日後に至つて、其友が今の青年に顯れた。「御降誕の祝日と云へば聖母が光榮の大王を御産み遊ばした日であるから、毎年この日に聖母は煉獄へ降つて、多くの靈魂を救上げて下さる。今度の御祝ひにも澤山の靈魂を救つて下さつた。私も貴下の御祈禱によつて、さうした幸福にありつけるものと賴母敷く思つて居ましたのに、左る御沙汰もなく、獨り取殘されました。然し御復活の前夜には亦必ず御見舞ひ下さいます。で其時には是非〳〵御救ひ上げ下さいますやう、熱い涙を揮つて御願ひ下さい」と賴んだとか。

右はシャルトローズ會のヂオニジウス師が記殘された說敎集に出て居る話である、煉獄の靈魂を慰めるのに聖母が如何なる御情を持ち給ふか、我等の祈禱も亦如何ほど大きな權力を有するかと云ふ事が、十二分に伺はれるではないか。さすれば我等は今より屢々煉獄の靈魂を思ひ、爲に聖母の御情を祈らねばならぬ。彼等は絕えず我等の事を思つて居る。我等の祈禱を俟ちに俟つて居る

のに、始終忘れて、滅多に思出しもしないと云ふは、餘りのことではあるまいか。我等の祈禱を、苦行を、施與を、贖有を聖母の御手に付して之を神に献げて戴いたら、彼等ははや夫だけでも天國へ翔上れる樣になつて居るのかも知れないのである。聖母が大なる慰藉を手にして煉獄へ降り、世の人から祈つて戴いた多くの靈魂を救取つて、之を天國へ案内し給ふのに、我等の愛し愛されて居た靈魂だけが、誰からも祈つて戴かなかつた爲に、獨りその苦しい煉獄に取殘されたら如何にも可愛相ではないか。若し其靈魂が悲しい姿をして我等の前に立顯はれ、「私ばかり取殘されました、貴下が祈つて下さらなかつたから」と嘆いたら、何と辯解することが出來るだらうか。

要するに聖母は憂き人の慰藉である。貧しい人、辛い勞働を爲す人、裏切られ、死別れ、無理に迫害められ、憂苦、悲哀に沈んだ人を愛し給ふ。すべて御名を呼び、御援助を求める人に情を垂れ、慰藉を雨らして下さる。殊に臨終の

苦悶に惱める病人の枕頭に附添ひ、之が力となり、援助となり、慰藉となつて善き終焉を遂げさせ、審判の廷に伴ひ行き、之が爲に辯護し、煉獄にまでも降つて之を憐み、之を救ひ取つて下さるのである。

されば何時も、如何なる場合にでも、この情厚き聖母の御袖に縋付くことを忘れてはならぬ。それと共に亦聖母の御手本に倣ひ、憂苦、悲哀に沈める人々を憐むべく務めよう、「福なる哉、慈悲ある人」、肉身上の苦でも、精神上の惱でも、出來るだけの同情を傾けて之を慰める、我等に對して禮を缺き、横暴を働き、損害を加へた人にさへ情を掛けて、快く赦してやる。況んや弱い、貧しい、無知無學な人を見ては、いよ／＼親切を盡し、同情を表して、其不足を堪へ、その過失を赦し、その知らざるを教へ、その至らざるを助けて、少しなりとも憂き人の慰藉たる聖母に倣ふ所がある樣にせねばならぬ。

（實例）——ベルナデッタの永眠——ベルナデッタは一たび聖母を見奉つてか

らは、一刻も早く死んで、その美しく、懐しき御母の御前に行きたいと思ひ焦れて、その日〳〵を送るのであつた。

彼女は固より多病であつたが、一八七八年十二月、容體が特に悪くなつて病院に送られた。數日を經てヌヴエル司教とタルブ司教等の面前で、再び洞窟の出來事を問はれ、堪へ難い苦を忍んで、一部始終を物語り、質問に應へた、自分が親しく見たこと、聖母の御口より承つたことを逐一申述べた。

それから病はます〳〵重り行くので、翌一八七九年三月二十八日修道院付司祭の手より悔悛、聖體、終油の祕蹟を受けた。越えて四月十六日、教皇ピオ九世より與へられた臨終の祝福を蒙るが爲め、謹んでイエズスの御名を誦へ、

「天主樣、私は心を盡し、靈を盡し、力を盡して主を愛します」と曰ひ、終に同日午後二時頃、居並べる童貞等と聲を合せて

「天主の御母、聖マリア、罪人なる我等の爲に祈り給へ」

と二度までくりかへし、三度目に「天主の御母、聖マリア」と云つた時に靈魂は早くも肉體を離れて、聖母の許に飛び去つた、時に年三十五歳、

遺骸は聖堂内に葬られた、それから二十九年を經て、千九百八年の九月に遺骸を發堀して見ると、葬られたまゝの姿で、靜に眠るが如く、少しも腐れて居なかつた。

一九二五年六月十四日教皇ピオ十一世はベルナデッタに福者の號を諡り、一九三三年十二月八日、更に之を聖女の列に加へられた。ベルナデッタの如く、憂き人の慰藉なる聖母を篤く愛し、その聖意に適ふべく務めて怠らないならば、また聖母にも愛され、慰められて、安然として、この世を立つことが出來るのである。

あゝ憂き人の慰藉なる聖母よ、我等の爲に祈り給へ。

——を　は　り——

Cum approbatione ecclesiastica

昭和九年四月二十日印刷納本
昭和九年四月廿三日發行

定價 一ヶ年 金壹圓(送料共)
〔本輯金參拾五錢〕

編輯兼發行人 丸 蓐 里
大分市上紺屋町
印刷人 龜 田 文 治
大分市上紺屋町
印刷所 ドン・ボスコ印刷學館

發行所 大分市上紺屋町
振替下關二三四九番 ドン・ボスコ社

サレジオ會編

聖者ドン・ボスコ傳

四六版　三八〇頁
總振假名ツキ
定價上壹圓五拾錢
並壹
送料　八　錢

見失なはれた我が子を狂氣のやうになつて、さがし求めて歩いてゐる母親の如く、世に見棄てられて顧みられない、そして又、頼るべき親兄弟もないところの哀れな若者や子供等の靈魂を求めて、街から街へ巷からちまたへ、世の人からは、ドン・ボスコは氣が狂つたのだと思はれた程それほど熱心に、「我に靈魂を與へよ……我に靈魂を與へよ！」と念じながら、彼等をさがし求めてさまよひ歩いた彼の姿を想ふ時、我々は聖者の尊い面目を生けるが如く眼前に見るのである。此の傳記は波瀾に富める彼の聖なる生涯の貴き人生記錄（ヒューマンドキュメント）である。

ドン・ボスコ社發行
大分市上紺屋町
振替下關二三四九番

マルジヤリア師
戸塚文卿師　共編

我主イエズス・キリストの聖福音

【第三版】
菊半截五六七頁
定價五十錢
（送料六錢）

全く飛ぶが如き賣れ行きを示してゐる本書は、第二版普及版を早くも賣り盡して第三版を發行するに至りました。この盛んな賣れ行きは如何に本書が讀者の間に歡び迎へられてゐるかを事實に示してゐると云つていゝと思ふ。私共は、責任を以つて弘く本書を皆様にお薦めします。

發行所　ドン・ボスコ社
大分市上紺屋町
振替下關二三四九番

浦川和三郎師譯

愛の王様（マテオ靈父の説教集）

四六版　三一四頁
定價（上製壹圓　並製七十五錢）
送料　八錢

子供の文庫（第一篇）

お話の花籠

浦川和三郎師著

四六版　一六四頁
挿畫多數
定價　五十錢
送料　六錢

ミサ典禮

菊半截　三一八頁
定價　三十五錢
送料　四錢

發行所　ドン・ボスコ社
大分市上紺屋町
振替下關二三四九番

マルジャリア師編述

ドン・ボスコの小傳

菊半截　六二頁
定價　十錢
送料　二錢

家庭の光（ドン・ボスコの教育法）

菊半截　一二二頁
定價　二十錢
送料　二錢

母性の模範（ドン・ボスコの母マルゲリータ傳）

菊半截　八八頁
定價　十五錢
送料　二錢

發行所　ドン・ボスコ社
大分市上紺屋町
振替下關二三四九番

トエ2β-22

附